

何でも望みを叶えてくれるが その度に持主の寿命を 縮めていく魔の皮

小林 新樹（高17回）

19世紀フランスの小説家バルザックの『あら皮』は、魔の皮を入れた青年の運命を描く。1980年、フランスに留学して間もない頃、こんな小説があることも知らずにテレビドラマ化されたものを見て、強く印象に残りました。

実はいきなり原題“Peau de chagrin”に接したため、「悲しみの皮」の意とと思い込みました（peau〈皮〉は人間の肌とか動物の皮を指し、chagrin〈シャグラン〉は悲しみの意）。ところが40年も経つてから念のため調べたところ、何のchagrinと同じ綴りで別の単語があり、“peau de chagrin”は「あら皮」つまり山羊・羊などの皮から作る表面のザラザラしたなめし皮、を意味することを初めて知りました。

でも以下の粗筋をお読みになれば、「悲しみの皮」と信じて疑わなかつた理由もお分り頂けるでしょう。バル



●こばやし・しんじゅ
上郷村・高陵中出身。数学者を
夢見て進学するも、人生を費や
すだけの意味のありそうな分野
には手が届かず、趣味の仏語で
身を立てるべく通訳に転身。齡
75で後輩の指導に専念。ブログ
『あてもなき夢想に耽らぬ人や
ある』執筆中。

ザックだつて、そう読めると気付いたからこそストーリーが頭に浮かんだのではないか：と、日本フランス語フランス文学会で発表しようと思つてゐるのでですが、会費を払う決心がつきません。



人知れぬ悩みに絶望して死を決意した一人の青年。昼の日中にセーヌ河に身を投げるのも余りに目立ち過ぎる……などと考え、夕闇の迫るまで河岸をさ迷い歩く。ふと足を踏み入れた骨董屋で古今東西の珍品奇貨を延々と眺めた挙句、わが命も今宵限りと店の主人に告げる。すると主人が一枚のあら皮を見せて言つたのに、

「この皮を手に入れた者は、あらゆる望みを叶えることができる。しかし望みが一つ叶うたびに皮は少しづつ縮んでいき、縮み終ると同時に持主の命も尽まる。あんたが良ければこれを進ぜよう」

嘘か真か如何にも奇つ怪な話ではあるが、青年の今の心境では、騙されたと思って我が物にするも一興。そしてその晩から、彼の欲望が次々と実現し始め、そのたびに皮も幾らか縮んでいる。

怖くなつた青年は、パリでも随一という邸宅を構えながら、中に閉じ籠つてただ天井を眺めるだけの生活を送るようになる。自らは何も欲すまいと、執事に自分の欲求を事前に察するよう命じたりするが、生きている限り、何かを欲せばにはいられない。

あら皮は小さく小さく縮んでいつて、遂に彼は早過ぎる死を迎える。



何とも恐ろしいストーリーです。今回、あら皮入手の場面と結末を読み直している内に、気が滅入つてしましました。ところでこの小説、悪魔に魂を売る代りにあらゆる望みを実現してもらつ、という古来の伝説の変形のようでもありますが…。

考えてみれば人の生とは、『あら皮』の話そのものではないか。色恋、仕事、金、権力、何であろうと求めてエネルギーを費やせば、必然的に時間も費やすことになる。人生たとえ百年あろうと、残り時間はその分確実に

短かくなつたし、それは寿命がその分だけ縮まつたことに他ならない…。

そんな寓意に気付いて暫くは、人生の深淵を覗き込んだような気がして神妙な気分になりましたが、小人閑居して不善をなす、相変らず時間を無駄に費やしてばかり。

その最たるもの、70過ぎて思い立つたピアノのお稽古。5年目に入り、YouTubeで気に入った曲に譜面が付いているとスクリーンショットでコピーして、何とか弾けることもあるが、膨大な時間を費やして、中級の域には到達できそうもない…。でも、家内に「あんた少しほうつとしていることがあるわヨ」と言われて認知症寸前だったのが、譜面を見てその通りに指を動かす訓練のお陰で、10年以上先送りできたのは間違いない。詳しくは拙ブログをご覧下さい。



何だか深刻な話になつてしまひましたので、お口直しにフランス小咄を一つ。

50過ぎの男性が、掛かり付けの医者に折り入つての相談に来ました…

「先生、酒と色事を絶てば、長生きできるんでしょうか」「うーん、長生きできるという保証は無いね。しかし長生きしたと感じることは間違いないよ」